

栄治は遠く見詰めるような眼差しで続けた。

「清が家出して音沙汰がないことを徳さんは悩んどつたけど、こうして夕子ちゃんが来たことで生活に張りが出たやろ。終わりよければすべてよし、やの」

言われて徳平はふと清に対する心の変化に気付いた。夕子が来るまでの何十年というものいつも息子の清のことが心の奥に刺のように引つ掛かっていたものだった。それが夕子の相手をしていたこの数ヶ月で知らない間にその刺が抜けてしまったことを悟った。清がどんな生活をしてきたにせよ、その責任はすでに成人してしまった清にあるし、これからの清の行動は清自身の責任においてなされなければならない。そう自然に割り切れていることを自覚したのだ。そのことを栄治に話し、付け加えた。

「ところでの、夕子のことやが」

「うん、夕子ちゃんがどうした」

「夕子は初めの頃と比べると、ずっと表情は柔らかくなったんやが、まだ一言も言葉が出んのや」

「三歳にしては遅いんかのう。けど、子どもの成長はそれぞれ違うけんの。そのことは子育てを経験したわしらが一番よく知っとることやろ」

徳平は栄治の言うことはもつともだ、と頷きながらも、しばらく様子を見てから「市報・高海」に載っていた「子育て相談」に行ってみようかと思つた。

ふと徳平は清が三歳の時はどんなだったかと思いだそうとしたが、どうしても記憶はよみがえらなかつた。

「不思議やの、栄治さん。あない重い錘を心にぶら下げとつたのにその錘がどっかにいってしまつたわ。わしも七十四歳にしてようやく子離れができた、ということかの。それとも清の代わりができたせいかの。ようわからん」

栄治は腕組みしていた手を解いて両膝をなでた。

「そうか。それを聞いてわしも安心した。わしは最近、祐一のことばかりが気になつての。帰つて来てくれたら、と思ふんや。わしがまだ若かつた頃にはやせ我慢して、ええかつこして故郷になんぞ帰つて来んでもええ、一緒に住んでもええというふりをしとつたが、この頃はえらい寂しいでの。徳さんと違つてわしはまだ子離れができとらんらしいわい」

徳平は慌てて話題を変えた。

夏休みは終わったが、商店街に降り注ぐ日差しはまだ夏の強い名残を帯びていた。それでも陽が落ちると幾分しのぎやすくなつてきたので、秋がそろそろと忍び寄っていることを感じた。

徳平のかみさんがパートから帰つて来ると額にシワを寄せて心配そうな声で言った。

「あんた、栄治さんがますます『たそがれ』となるようになつとるらしいで」

徳平はこの言葉にひやりとした。聞くのが怖かつたが耳をふさぐわけにもいかなかった。

かみさんは帰りに昨日橋のすぐそばにある花屋に仏さんの花を買いに寄つてきた。花屋のおかみさんが言うには夏休みが終わつた頃から、毎日栄治の栄治が決まつた時間に昨日橋にやつて来る。それはいつも夕

方である。そして西の夕焼け空に向かって「祐一、帰って来い」と呼びかけ、薄暗くなるまでそこに佇んでいる。以前は一週間に一回くらいの割合だったが、近頃では毎日のように昨日橋にふらふらと来る。歩いて来る様子もかつてのしつかりした栄治の足取りではない。栄治の息子の祐一はとつくに亡くなっているのに、本人は本気で言っているのか、それともただ寂しいから呼びかけているのかわからない。それで栄治の状態が気にかかってしかたがないとのことだった。

さらに花屋のおかみさんは「栄屋の栄治さんは奥さんを亡くしてから、表向きでは立ち直っているように見えたけど、結局そうではなかったんではないかしら。内面では少しずつ現実と願望との境目が見えなくなっていたのではないでしょう。それがこの頃になって

いで」

徳平は永年連れ添ったかみさんを頼もしそうに見詰めて、さらに女性陣の食事に関しての心遣いに感心した。「それはありがたいこっちゃ。栄治さんは酒屋のくせして全くの下戸やからの。好物はあんぱんと饅頭ときているから、そればっかり食べよる。おなごしさんが氣いつこうてくれて助かるわい」

十月に入った。秋が急に深まってきたが、商店街でも夜になるとまだ秋虫の音色がリーリーリーとかすかに聞こえてくる。

徳平は栄治の誕生日が近づいてきていることが気にかかった。栄治は徳平よりちようど一ヶ月早く生まれたから、誕生日は十月九日だ。

急に表に現れ出したのと違うかしら」と付け加えたと言うのだ。

「なあ、あんた。栄治さんのおかみさんの葬式の顔を合わせた栄治さんの親戚の人たちはえらいしつかりものばつかしだったやろ。しばらくは商店街の人たちで栄治さんを見守っていこうとは思いうけど、病気が進行して、あたしらの手に余るようになったら親戚に連絡してあげんな」

徳平は黙ってうつむいて考え込んだ。そしてしみじみと言った。

「ああ、それまでは温かく見守ってやらんとな」

「うん、もちろんや。吉野のおかみさんも時々、お好み焼きを持って訪ねて行っているみたいやし、商店街の婦人部長さんも惣菜を届けたりして氣いつけとるらし

徳平は今まで誕生日会や誕生日プレゼントなどという

ものとは無縁であった。誰からもそんなことをしてもらったこともなければ、受け取ったこともないので、誕生日会などというものは西洋から入ってきた習慣なんだろうと思っていた。

最近の親は子どもたちの誕生日パーティーなどというものに対して血道をあげているようだが、その気持ちがあまり理解できなかった。ところが今回、徳平の心に生まれて初めて栄屋の栄治の誕生日になんかしてやりたい、喜ばしてやりたいという気持ちが自然とわいてきた。これも栄治が段々と『たそがれ』で、時々、さみしそうな表情を見せるからだろうか。きつとそんな時には息子の祐一のことを考え込んでいるのかもしれない。

徳平は何をしてやったら栄治が喜んでくれるの
らうかと頭を捻った。そしてあることを思いついた。
隼人と航平が店に寄った時、徳平は二人にみんなで
栄屋の栄治じいちゃんに誕生日のプレゼントをしな
いかと持ちかけた。

「わしは栄屋さんには将棋の相手をしてもらうたり
して世話になつとるしな。それで何か誕生日にお礼を
したいんや。ほれ、栄治じいちゃんは隼人と航平の
誕生日の時にジュースを一パックずつくれたやろ。
二人もお返しちゆうもんをせないかんしな」
隼人は考え込んだ。

「うん、賛成だけど、栄治じいちゃんが一番喜ぶもの
はなんだろうな」

航平はプレゼントを買うのに小遣いが足りないので

はないかと心配そうに尋ねた。

「徳じいちゃん、ひよつとして大人のひとつて、値段の
高いものを喜ぶんじゃないの」

徳平はにっこりして、そんなことないよと手を左右
に振って二人を安心させた。

「それがただですむことなんや。しかも栄治じいちゃ
んが一番うれしいことや。でもそれにはどうしても
隼坊と航ちゃんに協力してもらわんといかんのや」
男の子二人は、なに、なに、なにと興味津々で身を
乗り出した。夕子は横でおとなしく人形を抱いて聞い
ている。

(以上3月26日放送分)